

原発 そこが問題だ

第 5 号

2021 年 12 月 13 日

原発反対の会吹田

wasser861.a@pure.zaq.jp

《避難者の一人として今》

文筆朗読家 井上美和子

10 月の末から 11 月 1 日にかけて、水俣でのシンポジウムに参加してきました。9 月に公開された映画「MINAMATA」を観てのリモート対話会に参加し、福島原発事故避難経験者の一人として見解を述べた数日後、熊本大学さんからのお誘いを受け、水俣へ行って来ました。

水俣病事件の歴史そのものとも言える患者ご本人やそのご家族を、次々に訪ねてはお話を伺うという贅沢な企画で、疲れを感じる暇も無いほど、どの方の言葉も福島県人の私に深く強く響きました。そしてその響きは今なお続いています。

そうして綾部に帰ってからも考えを巡らし続ける中で、今の時点で浮かび上がって来るものの。

原発事故を確信し福島からいち早く避難した私は、本当なら南相馬市で過ごせたかもしれない 10 年余りを、京都府で避難生活として暮らした。子供達健康被害を避けるために。水俣病事件は、子供から年寄りまで、ほとんどの住人がその地に留まり生活を続けた。

どちらも住民同士の分断を経験してはいるが、大きく違うのは、水俣では「生活圏の中で起こる激しい対立」を経験している。逃げも隠れもせずそこに在り続けて実態同士の対立の過去がある。

一方、福島ではどうだったか。県外避難をした私にとっては故郷の地が人が遠いものとなった。福島県内では原発事故に関連する「対立」も「会話」すらもがいつしかタブーとなってしまう。

「原発事故は過去のもの」で、「福島原発事故は公害では無い」という発言に出くわす事もあった。

社会全体の原発問題への関心も年を経るほど低くなって行くのを感じていた。

この実状に訴えかけられる何かを自分の中で探し出そうとして悶々としていた。

そんな私に転機の鍵を与えてくれたのが、2017 年秋に京都市で上演された一人朗読劇「線量計が鳴る（中村敦夫さん）」でした。

感動して、あんな劇の福島の母版とか、あったらいいなあ、誰かやんねがなあ、と思ったものだった。

事故後 8 年が経った頃。原発事故で避難した事だけではなく、土着の福島人が育み伝えてきた豊かな暮らしの姿を忘れられたくない、それを伝える為に私に出来る事は有るのか、と自問自答を繰り返した。

そして 2019 年 5 月のある時「故郷の言葉で」朗読をする構想が浮かんできた。
原発近隣住民の原発避難の実情や記憶。
その語り辛さに交わる経験がある私が朗読をする事で、
語り辛さを抱える人の一部分でも、社会に伝えられるかもしれない期待を込めながら原稿
を書き、
2019 年 9 月『ほんじもよお語り』と題した朗読公演は、京都で動き出した。
福島原発事故のいま今の、又は今昔の出来事に「向き合い続ける」場が、私達にもきっと
造れるはずだ。
そんな想いと共に私は、原発事故被害を生きる福島県人の一人として『ほんじもよお語り』
を書き続けている。

これは福島の人だと思っています。井上美和子さまには「原発ゼロの
会・摂津、千里丘（吹田）」で学習会の講師をお願いし、2019 年 2
月 21 日大阪地裁の原発賠償関西訴訟の口頭弁論で原告団を代表
して意見陳述されたとき初めてお会いしました。とても心のこも
った陳述で、原告団の人たちは涙をこらえていました。被告の
東電や政府の人たちは居眠りしたり薄笑いしていました。

事務局



原発賠償関西訴訟

日時：2022 年 2 月 10 日（木）13 時～

場所：大阪地裁本館玄関前

13 時 15 分傍聴券抽選

14 時開廷

- ・抽選に外れた方には 14 時から模擬裁判があります。
 - ・その後、弁護士会館で報告会があります。
- ぜひご参加ください。

スタンディングアピールに参加下さい（JR 千里丘駅東口・毎月 11 日 17 時～）